

小川一乗著『空性思想の研究Ⅱ——チャン

ドラキールティの中観説——』

江島 恵 教

チャンドドラキールティの中観思想についての研究は、ラ・ブレ・プサンによる『ブラサンナバダー』のサンスクリット校訂本（一九〇三—一九一三年）、『入中論』のチベット語訳校訂本（一九〇七—一九一二年）とそれと並行して行なわれたフランス語訳（一九〇七—一九一一年）の公表以来、多くの研究の蓄積を見てきた。わが国においても山口益博士等による研究があり、インド中観思想研究の一潮流となっている。とくに近年はチベット人の手になる著作の研究に伴って、チベット仏教におけるチャンドドラキールティの評価・位置づけが、パーヴァヴィエューカカのものとともに、明らかにたつてきつつある。

本書の著者小川一乗氏は、そのような研究動向のなかで、山口博士等の指導のもとにチャンドドラキールティの研究を開始し、いままで多数の論文を公表してきた。本書はそれらを踏まえて、チャンドドラキールティの名著『入中論』（頌・註、そのなかでも全体の三分の二の量を占め、いわゆる中観思想を全面的に展開する第六章に焦点をあて、その思想的特徴を明らかにしよう）と企図している。

全体は二部（二冊）からなる。「第一部チャンドドラキールティ

の中観説」は本論部分であり、まず、チャンドドラキールティが無自性論者の立場から絶対否定 (prasaṅga-pratīśedha) の中道を自らの思想基盤としていることを確認したうえで、二諦説中の世俗諦（第二章）、所知障（第三章）、法無我（第四章）についての彼の解釈が紹介・分析される。彼の場合「世俗諦とは世俗を諦と見なす世間人（凡夫）においてのみ諦であり、聖者（仏道修行者）においては、世俗は諦とされず、世間的な諦（世間における正しい認識）は『唯世俗 (sadvṛti-matṛa)』にすぎない」（二頁）とされ、パーヴァヴィエューカカが実世俗を容認し、それを積極的に利用しようとしていたこととの対比がなされる。これは、『ブラサンナバダー』で、「世俗」を「無知（無明）はあまねく一切の事物の、真実を覆いかくすから、世俗といわれる」（二四頁。傍点部分は著者の訳で欠落）とする語義解釈に関連するわけであるが、真実を覆うものとしての無知あるいは無明、しかも不染汚のそれが所知障と理解されていることを、著者はツォンカバの註釈をたよりとして明らかにする。ついで「法無我」は大乗特有のものでなく、小乗でもなりたつとする、チャンドルキールティ独特の解釈が紹介される。

さらに著者は「第五章 諸学説批判」において、『入中論』第六章中に現われる「唯識説批判」の論点とその概要を提示し、「スヴァータントリカ中観説批判」の節のもとに、チャンドドラキールティが、「『自らの主張なき』無自性論」の立場から、パーヴァヴィエューカカが独自の論証式を行使することを、二諦説についての意見の相違などを含めて論じる。この部分は、七世

紀の中観論者としてのチャンドラキールティがどんな問題意識をもっていたかを主要課題とする。いわば彼にとつてカレントな問題が対象となるはずである。ここで著者は、唯識説批判については山口博士の『仏教における無と有の討論』にその詳細を委ねつつ概観する。またバーヴァヴィヴェカ批判については、チャンドラキールティがそれを全面的に展開するに至る『ブラサンナバダー』第一章のことを配慮しながらも、『入中論』中にサジュエストされるそれについて、ツォンカバの註釈に依拠して、論点の明確化に努めている。

さらにこの「第五章 諸学説批判」には、アールヤデーヴァの『四百論』第十章「破我品」に対するチャンドラキールティの註釈の和訳が、テクスト・クリティクを踏まえて附加され、補ないとなっている。

以上のように主に『入中論』第六章を中心に論じてきた著者は、一転して、その第一章の第一―四偈、あるいは結章第一―五偈に注目する(第六―八章)。周知のように『入中論』は『十地経』を下地として菩薩行の展開に沿って論を進めているわけであり、その著述の動機・目的に目を転ずることにより、チャンドラキールティの中観思想の根底が一層明確になるであろうという、著者の着眼による。ここで著者は、チャンドラキールティの仏陀観・菩薩観を分析することによって、「大悲の思想を起点とし、菩薩の思想を軸として、仏教全体を把握している」彼の仏教観を導出してくる(一四四頁)。

ところで菩薩は十地の階梯を経て修行を積んでいくが、その

過程のなかで、現象する事物を「唯世俗」と見て聖者の域に進む場合がある。このことが『入中論』第六章で簡潔に述べられており、いわゆる唯識説の「入無相方便」に対応する。著者は、第一部の「結章」において再度「唯世俗」に焦点を絞り、それが唯識説的な「唯心」「唯記識」との対比のもとで現われたという理解を示し、「ともあれ、「唯世俗」という「唯」の思想の上に、まさしく、自らを祖師龍樹に帰依する中観者を強く自覚した月称の本領が遺憾なく表明されていると見なすことは許されてよいであろう」と結論する(一七四頁)。

本書第二部は、『入中論』に対するツォンカバの註釈『意趣善明』(Dgoñs pa rab gsal)第六章のチベット語テキスト本文とその和訳を収めている。小川氏はさきに『空性思想の研究——入中論の解説——』(文堂堂、一九七六年)を出しており、そこで「採訳」されていたツォンカバの註釈文を独立した形で和訳しなおしたもので、五七〇頁余に及ぶ大部となっている。以上が本書の内容概観である。ところで本書は「空性思想の研究Ⅱ——チャンドラキールティの中観説——」をタイトルとして、いま言及した前著は、ナンバリングがないが、その一となっている。その意味で、本書は前著に続く、あるいは前著を前提としつつも、いちおう独立した著作として取扱われるべきであらう。

さて、本書はチャンドラキールティの中観思想の特徴を種々の側面から考察し、そこで取り出された諸特徴を、全体的に、

いわば構造的に再構築しようと試みたものである。いままで全体的視野に立ってチャンドラキールティの中観思想を論じたものが少ないだけに、その試みに関しては高く評価されてよい。また部分的にも、『入中論』における大悲の重要性の指摘、所知障の位置づけなどには著者の卓見が示され、学界に新しい知見を惹らし、中観思想研究にある一定のインパクトを与えるものと思う。

ただ本書では、著者自身が「はしがき」で懸念しているように、チャンドラキールティとチベット学者ツォンカパに対する著者の「主体的思い込み」が論の進めかたを支配している感は、否めない。このことは、前著の『空性思想の研究——入中論の解説——』が、チャンドラキールティの『入中論』(頌・註)の和訳でもなく、ジャヤーナンダの『入中論疏』(tikā)の和訳でもなく、また後代チベットのツォンカパの手になる註釈(Dogras parābhāṣā)の和訳でもなく、「採訳」であることと関係する。ツォンカパは『入中論』をチャンドラキールティの主著と見て、それを教義的にどう解釈し位置づけるかに腐心しているわけであり、『入中論』註釈の形態をとりながらも、それを通じてチャンドラキールティの中観思想全体の評価を行なっている。彼にとっては、チャンドラキールティがまず『入中論』を書き、後れて『プラサンナパダー』を著作してバーヴァヴィヴェーカ批判、ブッダパーリタ擁護をより鮮明にしたといった、個人史的経緯は、ほとんど問題にならない。したがって、ツォンカパに依拠することが大きければ大きいだけ、教相判釈的な『入中

論』解釈が前面に出、チャンドラキールティの思想的变化の細部は見失われることになる。本書が『入中論』を「採訳」で引用しつつ論を進めるのは、その意味で、歴史的感覚を欠くと言われてもしようがないと思われる。

また「採訳」は訳者の解釈を媒介とするから誤訳の危険性を増大させ、またそれに基づく理解を歪曲させる虞れを招く。例え、

「中観者に対して、かれ(唯識論者)によって回答がなされたそれぞれは、「中観者の」主張と等しいもの(原文: *daṁ beaṁ mthuns*)と見られるから、唯識論なるかの議論は排除されるのである。諸仏によって、いかなる聖教にも、諸法は諦 (*sarva*) として実有であるとは説かれていない。」(第六八偈) (二九頁。傍線は『入中論』本文を示す。)

と本文が紹介され、「この偈の中には、無境として一切の世俗が否定されることへの無境説に対する「チャンドラキールティ」の賛同と、それ故にこそ、そこに主張されている唯識としての識論に対する「彼の」批判とが看取されるのである」(二九頁。「」内は筆者の補ない。)と述べられているが、これは適切さを欠く。筆者であれば、

「この「識論者」が「われわれに対して」いかなる反論を提示しようとも、それぞれを「新たに論証の必要な」主張に等しいもの (*pratiṅga-sama* = *sādhyā-sama* 所立相似) と見なし、その識論を排斥する。諸仏はいかなるところでも「事物は存在する」とは説いていないからである」

とでも訳し、著者のような複雑な理解は示さないであろう。翻訳に誤訳は不可避であるとはいえ、これは残念な一例である。

また本書には他にも誤訳の例が多いことを指摘しておかなければならない。

いずれにしても、本書は、ジャヤーナンダとツォンカバの註釈を充分に参照しつつチャンドラキールティの中観思想の特徴

を明らかにしたものととして、研究史上重要な位置を占め、前者と本書第二部も含め広範囲の知見を与えてくれるのである。も

って筆者は本書の刊行を心から歓迎するもののひとりである。

一九八八年二月、文栄堂、B5版、一五〇〇〇円
第一部論文編、七十一七六+29+10頁
第二部テキスト編、三三六+一二九+4頁